

# 一人一人に 寄り添う

～支援の基礎・基本～ 41



尾家 宏昭

しきかく学習カラーメイト代表

「色覚異常」は、男性の20人に1人、女性の500人に1人だとされ、1学級に1人いるとよくいわれる。しかし、家族が当事者や保因者である可能性などを含めると、五つに一つの家庭は関係者がいることになる。日常生活で困ることはごく少ないため、自分が当事者であることさえ気が付かないことが多い。

早期に「就けない仕事」を知らせることが子どものためだという主張もある。しかし、学校で行う進路指導は、発達段階に応じて系統的に行われるものだ。一つの身体的な特徴に過大な比重を置いて職業指導を行うことは大きな問題ではないか。

学校で色覚検査が推奨されているが、①色覚の違いとはどういうものか②色覚検査は何のために行うのか③検査からどのようなことが分かるのか④結果をどう役立てるのか⑤ということを、事前に子どもや保護者へ分かりやすく説明することは欠かせない。教育版インフォームドコンセント(十分な説明と同意)と言える。

現在「色覚異常」の資格取得制限の緩和が世界的に進められている。何年か先の状況も分からないまま、職業指導など絶対にすべきではない。多様性を認め合い、合理的配慮を行おうという考え方の隔たりも大きい。

学校で色覚検査が推奨されているが、①色覚の違いとはどういうものか②色覚検査は何のために行うのか③検査からどのようなことが分かるのか④結果をどう役立てるのか⑤ということを、事前に子どもや保護者へ分かりやすく説明することは欠かせない。教育版インフォームドコンセント(十分な説明と同意)と言える。

これまで日本では「色覚異常」だと進学や就職を拒否されてきた歴史があった。その影響が「劣った色覚」という誤った認識を持っている人が現在も多いように思われる。

実際、多くの人と異なる少数派の色覚の持ち主には判別が難しい色合いがあることは確かだ。しかし、多数派の色覚の持ち主にも、少数派にはない判別が

困難な場面もある。つまり、色覚の違いは、異常でも特別な性質でも劣ったものでもなく、単に存在する割合の違いなのだ。霊長類は色覚多型により集団で幅広い見え方を獲得し現在に至る。ヒトもその一種だ。その説明に、私は「少数色覚(者)」という語を用いている。

## 検査は事前に分かりやすい説明を

### 色覚異常 ①

色覚に限らず、人間は誰一人として同じではなく、違いに優劣をつけてはならない。こうした理解が学校や教員には必要で、色覚検査の案内の前には、子どもや保護者にも、そのことを伝えるべきだ。

学校や社会全体が色覚について正しく理解していけば、教室にいる「少数色覚者」を特別視することもない。本人も周囲へ気軽に違いを話せば、必要な手だても自然と見えてくるし、互いに支え合える社会になるだろう。少数色覚者への最大の支援は、周囲が正しく理解することだ。